



故 山本 空外氏
元広島大教授、僧、哲学者、書家で高名

京への飛藤

高僧、哲学者、書家として高名な故・山本空外先生は、国内以上に海外で名を馳せました。哲学者としては東大卒業後、欧州でハイデッガーやヤスパース、サルトルなどと親交し、書家としてはアメリカのレーガン大統領から作品を要請されたほどの名筆。広島原爆に被災して、その秋に出家し「無二の人間の形成」を確立しました。平成13年に100歳で遷化（死去）し、島根県雲南市には「空外記念館」が設立されています。

前住職と親しかった空外先生が満開の迎接の藤と初対面したのは昭和49年のこと。その香りとあでやかに心奪われ、当時住職を務めていた京都府山城町の法蓮寺に種を持ち帰り、無二園の庭にまきました。定禅寺からも接ぎ木の苗木を車で運び届け、現地に植樹。やがて数株が根つき、昭和56年ごろから本堂前いっぱい咲き出したそうです。藤棚は先生の趣向で3.8mとやや高め。空外先生が遷化した平成13年頃に藤の調子も悪化したそうですが、以来、世界遺産で藤の名所でもある「平等院（10円硬貨で有名）」の藤専門の職人さんが法蓮寺の藤を管理しているそうです。



↑京都府木津川市に咲き誇る法蓮寺の藤。迎接の藤の二世にあたる。法蓮寺の中島俊光住職から「今回、当寺の藤の由来を初めて知りました。良縁に感謝いたします」とのメッセージと画像を賜りました。



↑山本空外氏がレーガン大統領の要請に応えた物と同型の茶碗が定禅寺にも贈られている。空外氏いわく「こちらの方が上出来」とのこと。文字は「観」。



↓定禅寺の愛称「藤寺」を記した巨石は日本習字創設者の原田観峰氏が揮ごう。



↑「白雲山は是れ紫雲山」とまとめられている松口月城氏の漢詩「迎接の藤」。



↑虚無僧姿で列をなして入場し、本堂前で納められる藤祭りでの「献笛」。



↓対岸の池から定禅寺境内を望む、池周囲の欄干には藤があしらわれている。



石原無堂氏が般若心経を彫った茶杓



藤村 憲明氏（上野）
明暗流無堂会会長で上野焼不二窯窯元

ます。「決して損得では動かない無堂先生や高名な方々が定禅寺に集まったのは、前住職の人徳と藤にまつわる縁でしょう。毎年、藤の香りと景色に心癒されます」と師の意志を継ぐ藤村さん。献笛では、その恩と縁に報いるかのように、枝葉にまで染み入る音（ね）を花の下で響かせています。

樹が友を呼ぶかのように、つむがれた縁

→木製だった藤棚は、閉山後に方城炭鉱の鉄製送水パイプの活用で、強風にも飛ばされなくなった。現在の棚は昭和62年頃新設したもの。

迎接の心そのままに

紫の花を仰ぎ愛で、心ゆくまで楽しむ多くの人たち。「迎接の藤」もまた同じように、数多の人を眺め、見守り続けてきました。その名のとおり「迎接」の心が樹に宿るかのように、樹は人を誘い、人は樹

に引き寄せられました。ある人は学校の遠足で、ある人は花見の宴で、またある人は祖父母や親に手を引かれて……。この町を故郷として生まれ育った人の多くが、おそらく一度はこの藤を眺めたのではないでしょう。福智町が誕生する前から旧三町の商店や業者が名を連ねる紅白の提灯は、

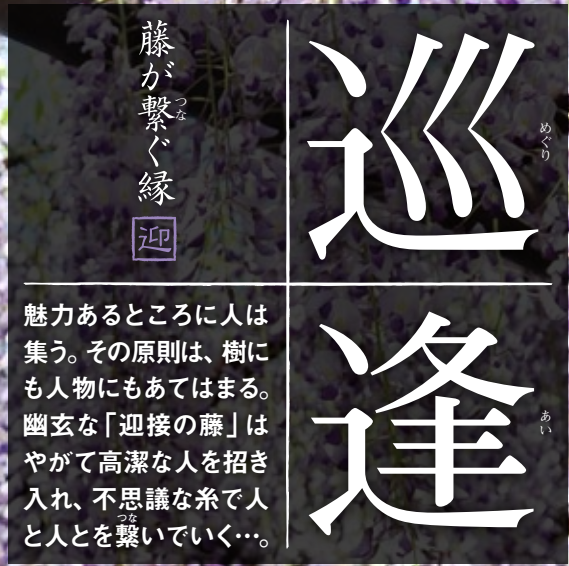
この藤が長く広く親しまれてきたことの証し。やわらかな光で、月とともに夜藤の風情を演出します。かつて運命的な出会いによって救われた迎接の藤は、類が友を呼び、霊樹が人を招くかのように、やがて不思議な縁で人と人をつないでいきました。高僧としてのみならず、哲学者・書家として有名な故・山本空外氏（元広島大学教授）は、定禅寺と迎接の藤をたいへん気に入る、度々この地を訪れて、寺宝の陶壁

や書などを多く残しています。

吟道八洲荘鷹洲会の創始者である故・芦馬鷹洲氏は定禅寺で吟詠道場を開きました。その縁で、吟詠漢詩界屈指の作家といわれる故・松口月城氏もこの藤に感銘を受け「迎接の藤」の漢詩を贈っています。日本習字の創設者である故・原田観峰氏も境内入口の大石に刻んだ「藤寺」の文字を揮ごう。「刻染付」の技法を生み出した豊前吉右衛門窯の永末吉右衛門（晴美氏）もこの藤をこよなく愛しました。

また、尺八の名人として名高い故・石原無堂氏は、定禅寺に尺八道場を開き、ここを本部に定めました。毎週、小倉から鉄道を利用して金田駅で下車し、徒歩で定禅寺まで赴き、熱心に指導したといえます。その無堂氏の弟子であった藤村憲明さんは師の名と伝統を残すため、無堂会の会長として毎年の藤祭りで「献笛」をし

人は心惹かれるまま、迎接に誘われ。



藤が繋ぐ縁 迎

魅力あるところに人は集う。その原則は、樹にも人物にもあてはまる。幽玄な「迎接の藤」はやがて高潔な人を招き入れ、不思議な糸で人と人とを繋いでいく…。

巡逢